

参不得なるうらみあり、師不得なるかなしみあり

加茂法話会 令和三年十二月二十四日

雪峰山眞覺大師義存和尚(822～908)、かつて發心よりこのかた、掛錫かしゃくの叢林、および行程こうていの接待、みちはるかなりといへども、ところをきらはず、日夜の坐禪おこたることなし。雪峰草創そうそうの露堂堂にいたるまで、おこたらずして坐禪と同死す。①咨参しさんのそのかみは、九上洞山、三到投子さんとうとうしする、奇世きせいの辨道べんどうなり。

【訳】雪峰義存禪師は、かつて仏道への完成を志してから、禪宗の道場に掛錫(修行)するにも、その途中、宿院を遍参するにも、その道が遠く遠く遙かであつても、場所を厭うことなく尋ねて行き、昼も夜も坐禪を怠ることはなかった。雪峰山に修行道場をはじめて開かれて、世に知られ渡るまでの間も、怠らずして坐禪に打ち込んだ。不惜身命の気持ちで命がけで坐禪をされた。

①指導者に参じ訊ねていた頃には、洞山良价(807～869)に九たび参じ、投子大同(819～914)に三回参じた、世にもまれなる仏道への精進であつた。 中略

②師の普説するときには、わが耳目じもくなくして、いたづらに見聞をへだつ。耳目じもくそなはるときは、師またときをはりぬ。耆宿ししゆく尊年ろうごすいの老古錐ろうこすい、すでに拊掌ふしよう笑呵呵しやうかかのとき、新戒晩進のおのれとしては、むしろのすゑを接するたより、なほまれなるがごとし。堂奥どうおくにいると、いらざると、師決しけつをきくと、きかざるとあり。③光陰は矢よりもすみやかに、露命は身よりもろし。師はあれども、われ参不得なるうらみあり。参ぜんとするに、師不得なるかなしみあり。かくのごとくの事、まのあたり見聞せしなり。

【訳】②師匠が弟子たちを集めて普く説法する時は、残念ながら、自分に聞く耳も見ず、目もなくて無駄に見聞を隔ててしまっている。自分に道理がわかつてくるときになると、師はもういない。年を取った指導者が手を打ちながら笑っている。新たに戒を受けた新米の私としては、席の末席に座ることさえも稀なことなんだ。親しく教えるものを受けられないものと、師の説くこれこそが仏法だ、仏法の極意を聞くものと聞くことができないものがある。③時が過ぎ去るのは、矢よりも早い。私たちの命は露よりも脆い。立派な指導者はいるのだけでも、私とその指導者に参ずることができない恨みがある。参じようと思つても指導者がいない悲しみがある。このよう
なことは実際に私が、目の当たりに見たり聞いたりしたことである。

■ ②師の普説するときは、わが耳目みみなくして、いたづらに見聞けんをへだつ。耳目みみそなはるときは、師またときをはりぬ。」

この箇所 of 例話として、「スリッパが成仏した」という老師の言葉の意味がその時は分からず、後年、スペシャルを見て、自分なりの理解をしたことを表現した。後からわかってくることがあるんだ。

平成十六年に放映されたNHKスペシャル

「永平寺一〇四歳の禅師」で、

「私は宮崎奕保えきほだ。私が永平寺だ。永平寺と私は一つ。自分くらい大切なものはないけれども、この大切な自分は、大勢の雲水たち、七堂伽藍を中心とする建物、木々・山・川・鳥や獣などの自然環境とともに生きている。

人も環境もみな自分だから永平寺を大切にすることが自分を大事にすることになるのだ」。